

受講生からみた

FLP

Faculty Linkage Program

4つのプログラム どこが魅力的?

昨年度から始まったFLP（ファカルティリンクージ・プログラム）。「どんな＜新しい知＞の経験をしましたか？ キタンなく書いてください」と、受講生4人に依頼した。4つのプログラム——競作である。

環境プログラム

田中嘉成ゼミ

総合政策学部3年 森田善之

中大ホタル…知ってますか？

中大の敷地内にホタルがいることをどのくらいの人を知っているだろうか。ふだんは立ち入ることはできないが、中大の敷地内に復元水路というものがある。これは、もともと

ホタルがいた水路を、硬式野球場建設に伴い埋め立てたため、その代償措置として作られたものである。中大ホタルの遺伝子をもつ個体は人工的に世代交代しているが、残念ながら現在のところ自生には至っていない。この問題に関しても環境プログラムを履修して初めて知ることとなった。

野尻湖で水質検査

私が所属する田中嘉成ゼミでは、「生物的自然の保全と人間活動の関

わり」というテーマの下で、フィールドワークを中心に活動しており、3年生2人、2年生2人が所属している。

週に1度のゼミの時間では、水辺環境のフィールドワークの基礎を学ぶため、中大の中にある復元水路の水質調査を定期的に行ったり、そのデータを分析し、データがどのような意味を持つのかを話し合ったりしている。

また、夏季休業中には、長野県の野尻湖で合宿を行ない、本格的な水質調査を行った。4地点において水深5mずつ、計20個のサンプルを採取し、水温など基本的なものからCODや硝酸態窒素といった栄養化度合いを示すものまでさまざまな値を測定した。ゼミ生全員が本格的な採水は初めてで、採水器の部品を湖

に落としてしまったり、水深が深くなると採水できなくなってしまうたりといったトラブルもあったが、無事に採水でき、湖沼調査の基礎を体で学ぶことができた。その後のデータ解析では、水温が急激に下がる水深である水温躍層や、水深とともに硝酸態窒素が蓄積していく様子を観測することができた。また、水温躍層で最も酸素量が多くなるという、

興味深いデータも得られた。

時間が欲しい

履修し始めて最も感じていることは、とにかく、時間が足りない、ということである。特に私たちのゼミの場合、相手が自然なのでフィールドワークを必要とするが、学部の授業が毎日あるとまとまった調査のための時間がとれず、中途半端に終わってしま

うこともある。充実したFLPでの学習のためには、時間の上手な使い方が不可欠であるということを感じている。

講義科目に関しては、他学部履修枠で履修するため、FLP履修の利点はあまりないのだが、20単位必修なので、環境に関する幅広い分野を高いモチベーションで受けることができ、また地球環境論（経済）などFLP履修者にも他学部履

修を認められる科目もある。さまざまな学部で幅広い分野を学ぶことで、たとえば、何か生物を保全する、という場合に生物学だけでなく経済、政治などを理解しておくことで、その政策を実行に移す説得力を持たすことができるということはこの1年半で学ぶことができた。

FLPの根幹をなす演習科目については、やはり、大きなメリットがある。指導される先生方はとても熱心に取り組まれ、また、環境と同じ目標を持つ履修者同士でディスカッションをしたり、調査結果を分析したりということを通じて、学部

なことは、ゼミ間のつながりがほとんどない、という点である。今後、環境プログラムのメンバーが就職、もしくは進学し、環境という非常に幅広い知識を必要とするフィールドで活躍しようとするとき、それぞれ専門分野を持った人同士のネットワークがとても重要になると思われる。せっかくな環境に対して熱心なメンバーが集まったのだから、ここでネットワークを作り、それぞれの専門分野を互いに学びあい、必要ときに互いに協働できるような関係を作りたいと感じている。

講義科目に関しては、他学部履修枠で履修するため、FLP履修の利点はあまりないのだが、20単位必修なので、環境に関する幅広い分野を高いモチベーションで受けることができ、また地球環境論（経済）などFLP履修者にも他学部履

そこで現在、1期生全員でのそのようなネットワーク作りをかねて、それぞれの専門分野を生かして何か環境プログラムとして成果を残そうという話になり、前述の中大の復元水路のホタル復元を実現させることを目標に動き始めている。復元と

ホタルのネットワーク

現在の環境プログラムで一つ残念

いっても、生物的な側面だけでなく、それにかかる費用、大学への働きかけや交渉、実施後の評価など、さま



野尻湖での水質調査。白ジャンパーが森田

さまざまな知識を集結させる必要があるため、それぞれ学んできたことを生かし、FLP環境プログラムの成果として、実現させたいと思っている。

環境プログラムは3年生対象に6ゼミ、2年生7ゼミがあり、3年生11人、2年生30人が受講している。

ジャーナリズムプログラム

松野良一ゼミ 文学部3年 小塚悠美加

多摩探検隊

私がFLPに入り、充実した日々をおくり出したのは2年の終わり、もうFLPに入ってから1年近く過ぎようとしている時でした。松野ゼミでは映像制作を学んでいます。しかし私は2年生の終わり頃、FLPが自分にとってプラスになっているのかがわからなくなっていました。やめてしまおうかと考えていました。そんな時、「多摩探検隊」に出会いました。「多摩探検隊」とは10分間の地域密着型情報番組で、私たちが企画・構成・交渉・取材・撮影・編集すべてを行っています。現在、多

◇

摩テレビ、多摩ケーブルネットワーク、八王子テレメディア、日野ケーブルテレビの4つのケーブルテレビで定期的に放送しています。そしてこの活動は毎日・産経・読売・東京・朝日新聞にも大きく取り扱っていたきました。「多摩探検隊」に関する活動は、松野先生が総合政策学部でもっておられるゼミから引継ぎました。「多摩探検隊」を作り始めたのは平成16年2月16日から行った鬼怒川合宿からでした。このころはまだ「多摩探検隊」という番組名はなく、この活動は「プロジェクト」と呼ばれていました。

まずケーブルテレビでの番組枠の確保から始めなければなりません。した。何もわかっていなかったため、無理のあるスケジュールをくみ、合宿から帰ってきてから3週間間でサンプル番組を完成させようと考えていました。しかし当然のことながら、公共の電波に乗せられると先生に認めていただけるような番組は

はありません。ここからが活動の始まりでした。毎月1本番組を納品し、広報・宣伝活動をおこなったり、HPを作ったりとただ映像制作をするだけの活動ではありませんでした。組織図もきちんと作り、現在も何度も修正しています。

「制作プロデューサー」役

簡単にはできません。なんとか先生から合格をもらったのは多摩テレビにもつていかなければならぬ最終期限の数時間前でした。この活動を始めるにあたって、ここまで大きな活動になるとは私たちの中の誰も想像していませんでした。この活動を甘くみていたのかもしれない。その場の雰囲気も手伝って「やりたい」という気持ちだけでスタートしたような気がします。そして提出してから約10日後、どうにか多摩テレビから10分間の番組時間をいただくことができました。しかしここで活動が終わったわけ

「多摩探検隊」の活動を始めてから私の生活はがらりとかわりました。それまではただゼミに所属していただけの私でしたが、鬼怒川合宿から「番組を作る活動を運営する」という仕事が始まりました。これは、実際に番組内容を作るディレクターや番組プロデューサーと違って、プロジェクト全体をまとめていく仕事で、「制作プロデューサー」と呼ばれています。簡単にいうとマネジメント役といった感じだと思います。この鬼怒川合宿にいくまでは、自分がこんなにも責任をもたなければならぬ役割につくとは思ってもし



「多摩探検隊」の放送画面

ませんでした。みんなを引っ張って
いかなければならないという不安と
ともに自分はこの番組作りに本当に
参加しているのか不安になることも
ありました。みんなが協力してひと
つの作品をつくっている姿を見てう
らやましくなってしまうこともあり
ました。そしてこの活動をどう運営
していくか本当に悩みました。今で

も悩みが尽きることはありません。
しかし、番組放送開始から半年が経
ち、ようやく自分たちがやってきた
ことを振り返れるようになってきた
ように感じます。この活動が今後、
続いていくかどうかは私たちの代に
かかっているといっても過言ではな
いと思います。私たちがこの活動の
第一線から退く日までにきちんとし
た「形」にしたいと思ってい
ます。

他学部生との新鮮な出会い

最後にもうすぐまたメン
バーが増える時期がきます。
去年は初めてメンバーが増え
るということはどうやって受
け入れようか、そして新2年
生に「多摩探検隊」をどう伝
えたらいいのか悩みました。
そしてその前年は現在の3年
生が出会った年でした。本来
は出会うことがなかった、学
部も趣味も違う人たちが、唯

一ジャーナリズムに興味があるとい
うことだけで集まったのでした。な
かなか仲良くなれなかったメンバ
ーが「多摩探検隊」を通してまとも
に協力して「多摩探検隊」を作り上げ
てきました。また学部が違う友達と
いうものは本当に新鮮でした。ひと
つのものごとに対して、それぞれが
異なったアプローチの仕方をする
という体験を私は初めてしました。F
3年生40人。
LPに入ってから大変なことの方が
多い生活になってしまいました。こ
んな大学生活もあつかいかなと最近
は思っています。あと1年間ですが、
くいのないように「多摩探検隊」に
打ち込みたいと思います。

◇

国際協力プログラム

田中拓男ゼミ 法学部3年 藤俊哉

学生自らテーマを決め、それに
ついて研究し、海外での現地調査を
踏まえて論文を執筆、ゼミナール連
合の学内大会においてプレゼンテー
ションをする。それが田中ゼミの活
動の柱になっています。教育班（コ
ミュニティーの力で教育を、カンボ
ジア）、行政班（グッドガバナンス
論再考、マレーシア）、開発班（プ
ータンから開発を問い直す）の3班が

プータンへ

経済成長だけを追うような形の
開発には疑問を抱いていた私たち
は、今までは違った開発を模索
したいと思っていました。そんなと
き出会ったのが、プータンのGNH
(Gross National Happiness、国民総

幸福量」という概念でした。私たちは、「これだっ！」と思いました。一国の開発計画において「幸せ」が明記されている国が他にあるでしょうか。

テーマはGNHでいこうということになりました。しかし、幸せの感じ方は人それぞれですし、そこを突き詰めていくと哲学になってしまいます。文化人類学的なアプローチになっても困ります。私たちは、あくまで開発経済学という学問の論文を書くこととしていたからです。そこで、「幸せの実現にはそこに住む人の望む開発ができればいい。現地でアンケートを実施しよう！」ということになりました。

ブータン政府から日本の大学に派遣されている留学生、ハという地方の副知事、比較のために当初考えていたラオス政府の方、さらにラオス大使館の方にもお話をうかがったところ、「アンケートは難しい。たとえできたとしても、あなたたちの望むような結果は得られないでしょ

う。開発についての質問は一般の国民には難しすぎる。欲しい物は何と聞いたとしても、何でも欲しいと言うに決まっている」との答えでした。次に考えたのが、「望む開発のためには、何が優先順位が高いのかを考えられなければいけない。そして、それを達成するためのモチベーションを上げることも必要だ。そのためには教育だ。教育費は無料とされているブータンでも、カバンや靴は必要だ。国民の約8割が農業に従事しているため、現金収入は少ない。現金収入を上げるためにはまだ機械化も十分ではない農業の生産性を上げればいい」。これが出発前に立てた私たちの論文構想でした。

就学率85%：

崩れる論文「構想」

ブータンでは、小中学校を8校訪問しました。首都ティンプと、去年までは外国人が立ち入ることは禁止されていたハという地方です。しか

し、そこでは、私たちが事前に日本で調べていた「ブータンの教育の普及は十分ではなく、程度の低い」という状況とはまったく異なり、素晴らしい教育がなされていたのです。就学率は全国平均85パーセント、欠席はほとんどない、という状況でした。他の途上国のように、就学率はそこそこ高いが、出席率は半分程度、というのとはまったく違います。先生の質も十分高いと感じました。日本と比べても遜色ない教育がブータンではなされていました。

さて、困りました。構想の建て直しです。

みんながやさしかった

ブータンではたくさんの人と会うことができました。環境教育のNGOである王立自然保護協会、GNHについて研究しているブータン中央研究所、教育省、JICA、青年海外協力隊の方、農業省に勤める日本人女性、たまたまブータンに来てい

た朝日新聞のインド支局長……。

ブータンでは、悪い人には一人も出会わなかった——それが実感です。みんなやさしく、いい笑顔をしていました。もちろん、身の危険を感じたことは一度もありませんでした。

ブータンでは、滞在中旅行会社のガイドと行動を共にしなくてはいけません。8日間も一緒にいたため、別れる時には涙したほどでした。

やはり実際に自分の目で見てみるとわからないことはたくさんあります。タイからのカーゴ便の就航により、今までになかったような自転車やペットボトルなどでゴミ問題が深刻化している、と現地で聞きました。これも日本では得られなかった情報です。

インターネットやテレビが普及しつつあるブータン、変化の渦の中にあるブータンの実際を見ることができたのは大きかったと思います。また、初めて会う人から有益な情

報をもらおうということの難しさを改めて感じました。いい情報をもたらしたのは、何年も現地に住んでいる日本人や、ずっと一緒に行動してくれたブータン人のガイドさんでした。

そんな中で、たくさんの善意に助けられました。ブータン在住の日本人の繋がりでたくさんの紹介をしていただきました。たとえばJICA関連で日本に来ていたブータン・ラ

オス政府関係者とお会いすることができたのは、昨年までJICAにいらっしやった西端教授のおかげです。

苦心のプレゼン

帰国後最初の大仕事が論文作成です。帰国から論文の提出締め切りまで、およそ1カ月間みなで何度も話し合いましたが、まとまりませんでした。そして、意見の集約は見られないまま、

ブータン青年と一緒に。右手前・藤



さらに1カ月後のプレゼンテーションの直前まで論争は続くこととなります。やはり、ひとつのものを作り上げるといえるのは大変なことですね。それでもなんとかプレゼンテーションでは、民族衣装を着用したり、ブータン人が歌ってくれた歌を途中で流したり、いろいろな工夫があると

ころを披露：幸いにも、優勝するこ
とができました。

5人編成の班活動は大変でした。全員の空き時間が一致せず、意見のぶつかり合いも日常茶飯事でした。

しかし、学ぶことはとても多かった。お昼休みはほぼ毎日、なんとか空き時間をやり繰りし、夜は23時の閉門

スポーツ・健康科学プログラム

吉村豊ゼミ

総合政策学部2年 保積宏至

スポーツ・健康科学プログラムはことしから始まったFLPである。私はスポーツをこれまでやってきたが、学問として捉えたことは今までなかった。スポーツというものを自分なりに見つめ直してみようと思つて履修している。将来も何らかの形でスポーツに関わっていききたいと思つている。

スポーツ健康科学では、各担当の先生方が自分の専門の分野を中心に各ゼミで全く違うことを研究してい

近くまで残っている。そんな生活でした。でも、終わってしまった今はそんな生活がとてもいとおしい……。FLPを通して得た実感です。



国際協力プログラムは3年生対象に7ゼミ、2年生8ゼミがあり、3年生37人、2年生39人が受講している。

る。基本はゼミごとの活動だが、お互いの研究成果を知るためにゼミ単位の合宿とは別に、夏休みにはスポーツ健康科学全体の合宿を行い、前期の研究成果を発表し合った。

ぼくの属する吉村ゼミでは、文献やその他の情報から学んでいくというよりは、実際に実験や測定をしてそのデータからいろいろ考えてみるというものが多い。

始めのころは、「自分について知る」をテーマにして、体重、身長、



ゼミ合宿の1シーン。左から2人め・穂積

体脂肪率といった基礎项目的なものから始め、骨密度や安静時代謝測定などふだんはあまりやらない測定もしたりした。代謝というのはヒトが生きていくうえで必要な体内で起こる一連の化学反応で、口から摂取した栄養素が体内で消化・吸収され、新しいエネルギーや細胞に合成・活用され、老廃物が排泄される。この

代謝の中でも安静時代謝は、座位姿勢でじっとしているときに消費されるエネルギーを表したものである。

「足湯」の効能は？

この他にも様々な測定はしたが、今までの活動の中でメインとなった実験は「乳酸値測定」という実験だった。現在では健康ブームということ

もあり、膝下だけを

お湯につけるとい

「足湯」が温泉など

で広まってきている。

足湯には疲労回復効

果があるといわれて

いるが、実際にはど

のくらい効果がある

のだろうか。

ぼくたちは、一般

的に体内の疲労物質

といわれている乳酸

が、体内にどのくら

い含まれているかを

測り、足湯による疲

労回復効果をみるという実験をした。ふつうに生活していても極端に乳酸値が高くなることはマレで、効果があつたとしても少しの差しか出ずに効果がわかりづらい。そのため運動直後の足湯による変化を調べる事にした。

そこで、都高校関東大会予選会の開催時に実際にこの大会に参加した選手のデータを取らせてもらった。

どの選手もレース直後に乳酸値を測り、その後にクールダウンのみのグループと、クールダウンと足湯の両方を行うグループと、足湯のみの3つのグループに分けてデータをとり

してもらった。統計的なデータ分析が終わっていないのではつきりしたことは言えないが、数値を見る限りでは、どのグループも足湯後に乳酸値が下がっているの、足湯に疲労回復効果があるということが予想で

きる。また、足湯を体験してもらった選手にアンケートをとった結果、

足が軽く感じたとか、リラックスで

きた。という感想などもあり、精神的な効果なども期待できそうだ。

前期はデータをとることがメインだったので、その分析などは十分にできていない。

スポーツ健康科学は新しい試みであり、学生の立場ではなかなか先の姿が見えてこない側面もあるが、自分たちのアイデアや、やり方次第ではどのようにでもできるというやりがいも感じている。先生と学生がともに手探りでFLPを作ろうとしているというのが本当のところだと思う。

他学部の人と自分とは異なった分野のことを学んでいる人たちとみんなで同じ分野のことを学んでいくという機会はFLPでしかできない経験だ。今の自分の周りの環境を大切にして、今後の大学生活にも活かしていきたいと考えている。



スポーツ・健康科学プログラムには4つのゼミ。31人が受講している。